

入選

母の背中

山口県 大河内小学校

四年 樋口 琥太郎

ぼくは、ようち園の年長のときに、今の家に引っこしてきた。ぼくは、ようち園にはバスで通っていた。いつものように家の前で、お母さんとバスが来るのを待っているときに、一台の車が通った。お母さんは車を運転していたおじさんに、ぺこりと頭を下げた。ぼくはお母さんに聞いてみた。

「どうして頭をさげたの。お友達なの？」

すると、お母さんが、

「今は、『えしゃく』っていうのよ。でも、おじさんとはお友達ではないよ。近所にでも住んでいる人なのかしら。」

と教えてくれた。お母さんは、お友だちではない人にもえしゃくをしていてふしぎだなあとと思った。

数日後、また同じ車がぼくたちの前を通った。ぼくは、少しドキドキしながら、お母さんみたいに頭をぺこりと下げ、おじさんにえしゃくを試してみた。すると、おじさんはニコッと笑ってえしゃくを返してくれた。なんだかとてもうれしい気持ちになった。

それから、おじさんに会うときは、ぺこりとえしゃくをした。最初は、きんちょうしていたけれど、だんだんと自然にできるようになった。

ぼくは、小学生になって、はじめて地区の草引きに参加した。草引きの場所に行くと、あのおじさんも来ていた。お父さんとぼくのそばに来て、おじさんが、

「ぼく、小さいのにちゃんとえしゃくができてえらいね。」

とほめてくれた。お母さんのまねをただけだったけれど、おじさんがほめてくれて、とてもうれしい気持ちになった。

ぼくが4年生になった今でも、そのおじさんは地区の草引きで会うといつも声をかけてくれる。

「大きな道に出るところのカーブミラー、見えにくかろう。あそこの木がじゃまだからちょっと切っておくね。」

と、おじさんはお母さんに笑顔で言った。お母さんが、「カーブミラーが見えにくい」とずっと言っていたのを知っていたぼくは、おじさんのやさしさに、またうれしい気持ちになった。今度、おじさんに会ったら、いつものえしゃくをした後に、

「おじさん、ありがとう。お母さんも木を切ってくれて、すごく見えやすくなったと言っていたよ。」と伝えてみようと思う。おじさん喜んでくれるかな。

ぼくは、知らない人に声をかけるのがはずかしくて、声をかけたり、あいさつをしたりすることがなかなかできない。でも来年、高学年の仲間入りをする。下級生のお手本になれるように、今からえしゃくをやっていききたい。

コロナウィルスのせいで、人と距離をとらなければいけない今、ぺこりと頭をさげるえしゃくで、少しでも心の距離をちぢめていききたい。